

令和6年度第1回白河市総合教育会議

議事録

1 日 程 令和6年12月20日（金）

2 場 所 市役所4階 全員協議会室

3 開 会 午後1時30分

4 出席者

（1）構成員

職 名		氏名
市 長		鈴木 和夫
教育委員会	教 育 長	芳賀 祐司
	教育長職務代理者	高橋 顕
	委 員	北條 睦子
	委 員	沼田 鮎美
	委 員	瀧澤 学

（2）市職員

職 名	氏名
市長公室長	鈴木 健一
市長公室企画政策課長	真船 薫
市長公室企画政策課企画政策係長	星 大介
市長公室企画政策課企画政策係副主査	坂本 美咲
教育委員会事務局理事兼教育部長	佐藤 伸
教育委員会事務局教育総務課長	鈴木 亮
教育委員会事務局教育総務課課長補佐兼総務係長	鈴木 一寿
教育委員会事務局学校教育課長	仁科 英俊
教育委員会事務局学校教育課主幹兼課長補佐兼指導係長	上野 康生

5 議 事

（1）個に応じた教育の充実について

（2）その他

6 閉 会 午後2時45分

1. 開会

○事務局（司会）

令和6年度第1回白河市総合教育会議を開催する。
原則通り会議を公開とし、傍聴を許可する。

2. 議事（1）個に応じた教育の充実について

○事務局（司会）

白河市総合教育会議設置要綱第4条第3項の規定により会議の議長は市長とする。

○市長

議事（1）の「個に応じた教育の充実」について、事務局より説明を求めます。

○事務局

大きく二つに分けて説明いたします。一つ目が「学びの変革」について、二つ目が「特別な支援を必要とする子どもへの対応」についてです。

まず、「学びの変革」についてです。

社会が急速に変化し、複雑で予測困難な時代だからこそ、自分の人生を切り開く逞しさを持ち、多様な個性を生かしながら、対話と協働を通して、社会や地域を創造することができる人を育成する必要がある、一斉で画一的な一方通行の授業から「個別最適化された学び」「協働的な学び」「探究的な学び」へと変革していこうとするものです。

「個別最適な学び」については、指導の個別化と学習の個別化に分けて考えることができます。指導の個別化は指導方法の工夫、学習の個別化は一人ひとりに応じた学習活動を目指すということ、「協働的な学び」は、クラスメイトや異学年の児童生徒、地域の人や各種専門家など多様な他者との協働を目指していくことです。

実践事例の一つ目は「習熟度別学習」です。子どもたちの習熟度に応じて異なる学習内容や方法を提供するもので、学習進度の速い子どもの応用力、遅い子どもの基礎学力を高めるという活動になります。

二つ目は「タブレットの活用」です。ロイロノートというアプリを活用し、子どもの学習状況をリアルタイムで確認することができます。さらに、協働学習の機会も拡充され、新しい気づきを促すことにも繋がり、動画や音声など多様な教材による多面的・多角的な理解にも繋がります。先ほど述べた習熟度別学習にも関連していますが、AIドリルも活用しています。

続いて「子どもの興味関心に応じた個別学習」です。総合的な学習の時間を中心に実施しています。興味や関心に応じて自発的な学習を促し、追求する過程では問題解決能力や批判的な思考力などを高める効果もあります。

次に、「特別な支援が必要な子どもへの対応」についてです。

特別な支援が必要な子どもや不登校の増加、さらには、家庭や地域の教育力が低下しつつある中、子どもたちが安心して学べる環境を整備する必要があります。

誰一人取り残すことなく、すべての子どもたちが、可能性や個性を伸ばすことができるよう、子どもたちの状況に応じた教育機会の提供や支援を行うことで、多様性を力に変える土壌をつくっていきたいと思っております。

まず、校内適応指導教室「スペシャルサポートルーム（ＳＳＲ）」についてです。空き教室を活用し、不登校傾向、登校はできるが教室に足が向かない、情緒が不安定といった子どもたちの心の居場所づくりに取組んでおり、オンラインでＳＳＲと教室や家を繋いだ授業も行っています。専任の教員が、生徒一人ひとりに丁寧に寄り添うことで、学校に足が向くようになった子、教室に入れるようになった子など、ＳＳＲを設置した成果も出ているところです。

次は、校外適応指導教室「さわやか教室」です。さわやか教室は、学校に馴染めない子どもが学校に籍を置いたまま通うことができる教室で、学校復帰を目指して一人ひとりの状況に応じた教育相談や学習・生活支援を行っています。現在、正式通室の児童生徒３名と体験通室２名の計５名が、インターネットを使って興味のあつることを調べたり、野菜を作つて収穫したり、プリント学習をしたりしています。

スクールカウンセラー（ＳＣ）については、市内全小中学校に配置しています。子どもはもとより保護者からの相談も受け、ＳＣと担任等が情報を共有し、支援策検討などを行っています。主な相談内容としては、友人関係、家族との関係、性格・身体、発達障害、学業・進路等となつており、令和５年度は、小学校で１,４２０件、中学校で２,４９５件の相談がありました。

続いて、福祉部局などとの連携についてです。貧困、虐待やネグレクト、ヤングケアラー、発達障害、親の離婚や失業、不登校やひきこもり、外国籍の子どもなど、学校だけでは対応できないケースが増えてきています。子どもの健全な成長と学びを保障するためには、市役所内の保健福祉部や児童相談所、警察などとの連携が欠かせないものになっています。

以上、個に応じた教育の充実について大きく二つに分けて説明させていただきました。全体を大切にしながらも、個に応じた対応をさらに進め、一人ひとりの個性や可能性を認め、多様な人々と協働しながら、様々な社会の変化を乗り越え、豊かな人生を切り開くことができる子どもたちを育てていけるよう、頑張っていきたいと思っております。

○市長

大きく「学びの変革」と「特別な支援が必要な子どもへの対応」の二つのテーマの説明がありました。

まず「学びの変革」について、現状はどうか、あるべき姿とのギャップがあるのかというところから議論を始めましょう。

○瀧澤委員

各学校の授業を拝見した際、私たちの時代とは全く違い、一人ひとりを大切にした教育、個性を伸ばしていくような教育だと感じました。

私たちの頃は、軍隊的な部分もあったと思いますが、今はそういったところがなく、昔だったら怒られたらどうというものが、子どもたちの個性であり伸ばしていこう、社会的なルールから完全に外れなければ一人ひとりの持っている力を伸ばしていこう、というような教育をしているのかなと感じました。

○市長

昔は一律ですね。軍隊的という表現は私もその通りだと思いますが、今は逆の方向に向かっております。ただ問題は、それに対して当然必要なもの、例えば先生

の数等も含めて、こうしたことをやるためには、何が重要で、何が足りないということについて感じることはありますか。

○北條委員

個々に応じた指導という視点で言えば、白河は鉄壁で、一人ひとりを大切にし、どんな子にも先生がついています。ただ、タブレットの活用方法については、感じる場所があります。

例えば、小学校で本を借りる冊数がとても増えていますが、図鑑などあまり文字を読まなくていいような本でも一冊にカウントされてしまう。私もそうですが、後で調べるからと字を覚えない。そういうことが増え、読解力の低下や字を書かなくなってしまうということもあると思います。

先生の仕事を増やしてしまうようなことで申し訳ないですが、私は、昔、担任が「レ・ミゼラブル」という本を毎日少しずつ読み聞かせしてくれたおかげで、学校に行くのがとても楽しみでした。今の子どもは、そういう純文学はあまり読まないと思いますが、全体から個へとなった場合に、先生や大人が子どもの興味を引くような書籍を推薦したり教えたりして、タブレットを利用しながら読書をする、文字に親しむという習慣がつけばいいなと思います。

○市長

私も、タブレットは、非常に便利であるけれど何か欠落しているものがあると感じています。

沼田委員は、個に応じた教育や、能力や適性に応じた教育をどう思われますか。

○沼田委員

子どもからの話でしか判断できませんが、先生が苦戦しているように思います。

子どもたちが多様化してきているというか、私たちが小さいころは発達障害という言葉はなく、ただ落ち着きのない子が何人かいるというような感じでした。しかし今は、発達障害という特性として認められていて、グレーゾーンの子もいます。

その子たちを含め、様々な子どもがいる中で、学力の高い子に対してそれなりの教育を受けさせているのかといえば、それはどうなのかと思います。どちらかというと、学力の低い子に対して手厚い教育が行われていると感じています。

○市長

昔から護送船団方式という言葉があります。最も遅い船にあわせて全体が進行することです。どうしてもそうなりやすいのですが、私も沼田委員と同様に、習熟度に応じてと言うものの、先生方の不安や負担は大きいと思っています。

高橋委員は現場のご経験が長いので、昔からこうありたいと思っていらっしゃると思いますが、具体的な課題は何だと思われますか。

○高橋委員

自分も教員時代、この習熟度別学習を行いました。いろいろなレベルの子がいるため、たくさん問題を用意しなければならず、人手と時間がネックでした。

学校にコンピューターが配置されたとき、問題をフロッピーに入れれば子どもが

自分の進度に合わせて問題を選択できるということで、やったことがあります。

一度作業してしまえば、他のクラスでも活用できたので、画期的だと感じましたが、準備がとても大変でした。

一方、ここがA Iを活用するチャンスだと思っています。どの問題ができて、次は何がいいかということ、これまでは教員が判断したり、子どもが自己判断で進めたりしていましたが、A Iが状況に応じて適切な問題を提供してくれるようになれば、教員の負担は大きく減ると思います。

ただ心配なのは、「機械にお任せ」では、子どもたちはやる気にはならないだろうということです。傍に立って声をかけ、背中を押さなければならない子やその問いだけでは満足できない子もいると思うので、教員自身が子どもたちを見る目を養っていかなければならないと思います。

○市長

教育長は教育行政のトップとして、様々な悩みを各校長から聞き、どうしたらいいかと考えていると思いますが、委員の方々の意見を伺い、現実とあるべき姿の乖離など、思うことがあればお願いします。

○教育長

個に応じた指導は決して新しいことではなく、以前から言われていたことです。戦後すぐに軍国主義が民主主義に変わった時から言われています。生徒の個性を重んじて、それを正しく伸ばすということは、その頃から言われていましたが、子ども一人ひとりの個性に応じる学びを学校教育の中で実現していくというのは、非常に難しいと感じています。

昔と比べれば個に応じた指導ができるようになってきましたが、子どもたちの学力をある程度まで高めるためには画一的な指導が効果的です。決められた時間割や教材で同じスピードで一斉に学んで、集団として調和が取れて一緒にやっていく。そういう形で学校教育が今までずっとなされてきました。

全体的に上げようとしてきたので、どうしても学力がなかなか高まらない子に標準を合わせてきました。個に応じるといっても、そこから漏れそうな子を漏れないようにするという形での個に応じる学習でした。

それが今、子どもたちの多様性が浮き彫りになってきた。能力があまり高くない子、ギフテッドといわれる能力がとても高い子、集団に馴染めない子、発達障害の子がいる。全ての子が社会で生きていくための能力を高めていくためにということで、個に応じた教育が改めて注目されてきているのかなと思います。

授業の中で個に応じた指導をしていくのは大変で、現場としては教員がもっと欲しい。また、今は学習すべき内容がとても多いので余裕がなく、フィードバックしようと思ってもできない。

さらに現在、福島県では1クラス30人、国は35人学級としていますが、一人で35人全員を見て、個に応じるということは不可能ですね。そのため、各学校も工夫していますが、教えるべき内容を精選すること、大事なポイントをしっかり押さえ学習すべき内容を精選することが大事だと思います。

また、すべての学校でできるわけではないですが、TT（ティーム・ティーチング）や、特に中学校だと空き時間の先生もいますのでその先生と協力・連携することが必要だと思います。A Iドリルのような形ですと一人で進められるので、先生

が関わらなくてもできる部分がある。タブレットをうまく活用するなどの対応が大事なのではないかと思います。

子どもたちの個に応じた指導と簡単にいうけれどなかなか難しい。それでも、以前よりは良くなってきていると思います。良くはなっていますが、さらに工夫していかなければならないと思います。

○市長

教える内容が以前より増えているということですが、10年、20年前と比べて、先生が子どもたちに教える事項、子どもの学習内容が増えているということでしょうか。

○教育長

小学校で英語やプログラミング学習が必修化されました。さらに今は、小学校4年生から中学校3年生まで、一年間に学習すべき授業総数が同じ1,015時間なので、6校時まで授業が入っている日が以前より増えています。

○市長

教える科目や内容の絶対的な量が増えているということですね。それに対して先生は少なく、個に応じた教育をするというのは難しいですね。

ではどうしたらいいのでしょうか。先生の数を増やせば済む問題なのか。高橋委員がおっしゃったように、定量的なものはAIにすればいい。問題はそれ以外のところです。

事務局の説明の中で、協働の学習もあるということでしたが、この協働の学習という意味をもう一度お願いします。

○事務局

今までは、先生が一方的に教え、子どもは受け身という形でしたが、協働の学習は、子ども同士やクラスメイトだけではなく、異学年や他校の児童生徒と活動したりする学びのことです。

○市長

どういう効果が期待できますか。

○事務局

様々な人と接し、多様な価値観に触れて、そういう考えの人もいるということに納得して、自分も深まっていくというイメージです。

○市長

おそらくそれは学校だけでは限界があると思います。塾ではそういうことを教えないと思うし、ではどこで提供するかということですね。

家庭でできるかという点、今は核家族で、両親が共働きでなかなか一緒に食事するというものもない。昔が必ず良いとは思いませんが、昔は、小学校1年生から6年生まで一緒に遊んで、そこに規律や秩序のようなものがあって、自然に学んでい

たわけです。先ほど協働学習の説明がありましたが、それは、学校ではなく、遊びを通して自然に学んできたものですよね。

学校でも家でもできない、塾は学力を高めることが目的です。いろいろな価値観を学ぶ場が必要となりますが、子どもたちの学びの場はあるのでしょうか。

○沼田委員

そういう場を作るのはなかなか難しいと思いますので、30人の学級に様々な子どもたちがいて、その中で学んでいくしかないのかなと思います。

極論になってしまうかもしれませんが、学力だけで子どもを評価する時代というのは終わりつつあるのではないかと考えています。一人ひとりのいいところに目を向け、それを伸ばす教育というのが必要になってくると思います。

運動能力の高い子や創造的なアイデアを持つ子、人を支えるのが得意な子、そういう子と一緒に学んでいくのが、これからの時代の学ぶ場所になるのではないかと考えます。

○北條委員

私は地域だと思っています。東地域は子どもが少ないこともあり、地域の方が学校に興味や関心を持ってくださっています。例えば、野出島プロジェクトさんが、子どもたちに野菜やお米の作り方などを指導し、毎年11月には収穫祭を行います。地域の人たちに感謝して一緒に食べる、生きた食育だと思います。

地域には様々な能力を持った人、力になりたいと考える人が沢山います。今、小野田小学校では、習字と絵画の指導に一般の方が来ています。その時間に先生方は指導を代わっていただいて、別な指導案を練ったりその準備をしたりできると思います。ですから学校は、もっと地域に働きかけて、困っているということを地域の人たちにお伝えすればよいのではないかと考えます。

一般の方にとって学校は敷居が高い場となっていますが、こうした取組みをとおり、子どもたちと地域が関わっていけると考えます。

○市長

以前「しらかわ未来フォーラム」で東中学校に行った際に、中学生がテーマを決めて地域の方々のところに行った話を聞きました。例えば、野出島プロジェクトで農業のこと、山口こうじ店さんや鈴木糰店さんで糰のことを聞いてきたと発表していました。これはいいことだと、地域との触れ合いがもっとあればいいなと思いました。話す内容が非常に具体的です。これはまさしく学びの場だと思いました。

今、地域自体も弱ってきているということもあるので、非常に難しい状況ではありますが、地域との繋がり、自分の母校に対する愛情もあるということで、そこで何らかのヒントがあるような気がします。

子どもたちが多様な価値観に触れる、協働してやっていく、そういうことを実践するために必要なものについて、何かご意見ございますか。

○瀧澤委員

事務局から協働学習の説明を聞いて、昔、自分もそういうことがあったなと思いました。

当時、大信中学校は1クラス大体30人で、5～6人のグループに分かれて学習していたのですが、先生に、朝早く学校に来てグループの子に学習を教えろと言われてました。クラスの中にリーダー的な存在をつくりながら、子どもたち同士で学習させようとする意図があったのかなと思いました。

今と比べて先生の言葉はすごく荒かったですが、先生の思いが伝わり、子どもたちにもそれ粹に感じる素直さがあったのではないかと感じます。昔のことを言っても仕方がないですが、今のような犯罪もありませんでした。

娘が病院の事務をやっていて、自分の子どもにも医者になるぐらい勉強して欲しいと思い、先生にどのようにして医者になったのか聞いてみたそうです。すると、「すごく外で遊んでいた。とにかく子どもは外で遊ぶべき、太陽の光を浴びて外でいっぱい遊べばいろいろなことを学ぶことができる。自分はそうやって医者になった」と言われたそうです。

タブレットやAIはすごく大事なことで、働き方改革にも必要な道具だと思います。しかし、タブレットを批判するわけではないですが、そのあたりのメリハリが利かないと、小さいうちにスマホやタブレットを預けることが果たして本当にいいのかなというのは、孫を見ていて思います。

○市長

タブレットはとても便利なので、どんどん使うべきと思いますが、どう使うかですよね。使わせ方、使い方をきちんとしなくてはならないと感じています。

先ほど、読解力が鈍っていると話がありましたが、本を読んでいないので当然読解力は鈍ります。図鑑をめくることは大切ですが、文字は入ってこないですよね。だから図書館で借りる冊数が多いとしても、どういう本を借りるかが問題です。何を学ぶかによって全く違うと思います。

今はロマンス詐欺が多く、40～50代が詐欺に引っかかってしまっている。SNSを使った手口はとても巧妙で、相手に顔を見せず、場合によっては別な写真を見せる。世の中にそんなに上手いことなんてありえないと普通はと思いますが、見事に引っかかるわけです。人間には欲があるから、心理を突いて巧みに欲を掴むそうです。そういったものを見抜く力とは何だろうと私はいつも思っています。

SNSはとても便利です。ただこれは、自分たちだけのグループができてしまう。このことを我々は非常に冷徹に分析すべきだと思います。

SNSのあり方という、オーストラリアでは16歳未満の利用を規制しました。情報が溢れる中、どう選別するかというのは人間の知恵です。何を選ぶかは、本人にしか判断できません。ただ、善悪や偽者と本物の違いがわからないくらい巧妙です。そういう時にどう見抜くかを教える方法はあるのでしょうか。ないと思います。最終的には本人の直感や感性になると思います。

そうするとやはり、外で遊んだり、地道に生きている人たちと話してみたりすることは非常に大事なことです。我々は教育というと学校の授業とってしまうところがありますが、やはり青空学級も必要だと思います。タブレットを預ければ子どもは勉強できると思いますが、よく考える必要があります。

もう一つ、特別な支援が必要ということでしたよね。今はそれが顕在化されたというか、社会が複雑になってきたからなのかわかりませんが、不登校も多い、発達障害も多いということは、社会の病気だと思っています。

ただ、基本的にはコミュニティがなくなっているということ、核家族が悪い

わけではないですが、本来、大家族の中で学んでいくものを核家族であるがゆえに学びにくいというところがある。人が亡くなる姿も見えないでしょう。子どもたちは、人は病院で生まれ、病院で亡くなると思っています。昔は家で出産して、亡くなるのも家でした。そういうことを通して、子どもは自然と何かを覚えていくと思います。こういう子が増えてきているというのは学校の責任ではなく、社会全体の責任だと思っています。

とはいえ、学校が一番顕在化する場なので、学校はこの問題に悪戦苦闘しているわけですが、どうすればいいのでしょうか。教育長はこの問題をどう捉えていますか。特別に支援を要するというのは何をもってそう決めるのでしょうか。

○教育長

医者の診断があった時、保護者としてみれば、自分の子どもに対して特別に支援をして欲しい、関わって欲しいという学校への要望があって、昔と比べると相当な特別支援学級の数になります。

障がいのある子も通常の学級と一緒に学習するのがインクルーシブ教育で、多様性を認めていく世の中において重要だと思いますが、発達障害と診断された子が特別支援学級に行っているケースが多いような気がします。

小学校低学年の時に発達障害を抱えていても、だんだんソーシャルスキルを身に付けることができるため、中学生ぐらいになるとある程度対人関係を作れるようになります。大人になれば、発達障害であることはあまり目立たなくなります。大人になれば、自分のことがわかってくるので、対応の仕方がわかってくるのです。

このため、これからは生き方、関わり方も教える教育が必要なのではないでしょうか。低学年のころは個別に丁寧にやって、高学年、中学生になったら、通常と同じような形でやっていくようなシステムにできればと思います。

○市長

世の中、教育イコール学校となっていますが、学校だけで学ぶことは限られているような気がします。やはり子どもの居場所づくりは大切なことだと思います。大人もそうです。大人の居場所というのはあってないようなもので、子どもたちはなおさらそうだと思います。

また、地域の関わりは非常に大事だと思います。子どもたちだけで協働体験するというのも必要かもしれませんが、全く違った年代の人たちから様々なことを教わるということも必要かと思います。

結論があるものではなく、大変難しい問題を孕んでいると思います。教育委員会は教育を通して社会を見ているわけですが、私たちも、地域の将来を見ている中で子どもたちをどうするか、どういう子どもが育ったらいいかということを考えています。見る窓は違うかもしれませんが、こういう人がいたらいいなということを願いつつ行政に携わっていく必要があると思います。

3. 閉会

○事務局（司会）

令和6年度第1回白河市総合教育会議を閉会。